

[019]生活体験学習研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4763160>

出版情報：生活体験学習研究. 19, 2019-07-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：



【歴代会長の挨拶】

学会発足に至る経緯とこれからの学会のあり方について

横 山 正 幸*

子どもの心身の健やかな発達に家事（炊事、掃除、洗濯など）や遊びなどの生活体験が大切であることは、今では論をまたない事実です。しかし、1990年代、それらは、あまりにも日常的であるがために、学問・研究の対象とは認識されず、必ずしも真剣に考えてはこれませんでした。そうしたなか、子どもの生活体験に目を向け、学術的な研究を深めると同時に、「生きる力」をもった子ども達の育成に寄与することを目的に設立されたのが、この日本生活体験学習学会です。早いもので、発足から間もなく20周年を迎えようとしております。

学会発足のきっかけとなったのは、1998年の4月、福岡県庄内町（現在の飯塚市庄内町）の「庄内生活体験学校」で開催された生活体験の意義を考えるパネル・ディスカッションです。会場となった庄内生活体験学校は、1983年に長年福岡県の社会教育に携わってこられた正平辰男氏（本会の元副会長、現在「NPO 法人体験教育研究会ドングリ」理事長）が中心となり、庄内町の全面的な理解と協力のもとにつくられた施設です。ここでは、地域の子子ども達が、一定期間合宿し、通学しながら自炊、掃除、洗濯、風呂沸かし、動物飼育（ヤギとウサギ）、農耕作業（野菜作り、収穫）、生ごみによる堆肥作り等、様々な生活体験をし、自主性・協調性・耐性などを高めることを目指しています。現在、全国各地で行われている通学合宿のルーツは、ここにあります。

この生活体験学校に大人向けの「生活文化センター」ができ、そのこけら落としを記念して開催されたのが上述のパネル・ディスカッションです。パネリストは、長崎大学の猪山勝利教授（社会教育学）、熊本大学の古賀倫助教授（社会学）、九州大学の南里悦史教授（社会教育法・行政論）、福岡教育大学の筆者（発達心理学）の4人でした。いずれも

それまで様々なかたちで庄内生活体験学校に関わってきた人々です。このパネル・ディスカッションの折り、長崎大学の猪山教授から子どもの生活体験がますます困難になるなか、この問題をより一層深め、発展させていくためには各地で地道に研究、あるいは実践に取り組んでいる人々が集い、情報交換する交流会の必要性が提起されました。確かに当時は、子どもの生活体験に関心をもつ限られた個人や団体が、いわば「孤立的」に活動しているというのが実情でした。

1998年12月の末、この猪山教授の提案に共感し、志を同じくする者が博多ポートタワー前の「ベイサイドプレス」2階のレストランに集い、「生活体験学習実践研究会発起人会」を発足させます。その後、発起人会では、会のかたちについて熱気をはらむ議論が何回か重ねられました。そのなかで会の名称は、当初考えられていた「研究会」ではなく、「学会」とし、かつ「日本」を冠する「日本生活体験学習学会」とすることが決まります。ここには、当時の関係者の子どもの生活体験に対する篤い思いと、会が将来大きく発展することへの強い願いや意気込みがあったと言ってよいでしょう。

こうして1999年9月には「第1回生活体験学習実践交流会」が庄内町生活体験学校で、延べ350名の参加者をもって開催されます。そして、翌2000年3月には福岡県立社会教育総合センターを会場に「第1回研究大会」が開かれ、学会は正式に発足します。以来19年、九州大学・南里研究室の関係者を中心とする事務局員の献身的な働きにより「学会通信」の発行、「学会誌」の発行、研究大会の開催など、様々な活動が積極的に進められてきました。その成果としては、学術面でも、実践面でも非常に大きなものがあったと思います。

*1999～2006年、初代会長。福岡教育大学名誉教授。

連絡先：〒811-4174 福岡県宗像市自由ヶ丘西町9-4 E-mail: yoko41@jcom.home.ne.jp

TEL：0940-33-1457 FAX：0940-33-1457

しかし、最近では、当初の期待とは裏腹に、会員数は伸び悩むどころか、減少し、運営上も非常に厳しい状況が続いています。こうした会員数減少の問題は、見方を変えると子どもの生活体験への人々の関心の低下を意味しているのかもしれませんが。そうだとすれば、背景には何があるのでしょうか。考えられることは、2000年代に入ってから学力重視や社会教育軽視の文教政策です。また、子ども時代、生活体験を十分してこなかった世代が今や大人になり、子どもの体験欠損への問題意識が希薄になっていることも考えられます。

ともあれ、子どもの生活体験の現状をみると、学会発足当時よりもさらに深刻の度を深めております。大人がプログラムし、指示しての「させられ体

験」「受身体験」や、メディアを通しての「間接体験」「擬似体験」「仮想現実体験」は、かつての子ども達よりはるかに多くなっています。問題は、自分から直接ものごとに関わる生活体験が幼い時から大幅に欠けているという事実です。これでは、「生きる力」をもった心豊かな子を期待することはできません。

生活体験学習学会を取り巻く状況は上述のように非常に厳しいものがあります。しかし、会員の皆さんには、そうした状況に臆することなく、これからも子ども達の未来のために自信と誇りをもって生活体験の重要性をそれぞれの立場から積極的に発信していただきたいと願っております。